

## ダロウとヨ／ネ／ヨネの組み合わせ

### The Combination of *darou* and *yo/ne/yone*

池田 英喜\*

(ikeda@isc.niigata-u.ac.jp)

---

*Darou* is one of the epistemic modality forms in Japanese. This form cannot be followed by the sentence-ending particle *yone* which functions as a certain speaker's communicative intent. In this article, I explained why this happens and by looking at the facts, *darou* sometimes shows the lack of speaker's confidence in his judgment.

---

#### 1. はじめに

認識のモダリティ形式ダロウと伝達態度のモダリティ形式ヨ／ネ／ヨネには共起できる場合とできない場合がある。

- (1) A: ?今夜は大雪になるダロウ・ヨ。
- (2) A: 今夜は大雪になるダロウ・ネ。  
B<sub>1</sub>: えっ、だったら早く帰らなくちゃ。  
B<sub>2</sub>: そうね、この分だとかなり積もるわね。
- (3) \*今夜は大雪になるダロウ・ヨネ。

本稿では、この点について考察し、これまで指摘されていないダロウの特徴を浮かび上がらせてみたい。

#### 2. ダロウの二つの用法

- (4) A: 見てのとおり、外は雪ダロウ。それなのにわざわざ今出かけることないよ。  
B: そりゃそうだけど、今日中に行かないと間に合わないし。

これはダロウの確認要求としての使用例である。今現在外が雪であるという事実を話し手は情報として持っているにも関わらず、聞き手に問いかけている。これは聞き手から同意を得ることで、自分の知覚によって得られた情報が確かであることを確認しようとしている。

---

\* 新潟大学国際センター 助教授

ここでは、ダロウの使用に当たって推論が働いているというより<sup>1</sup>、自分の持つ情報の確かさに対する不安感が現れていると言える。

また、次のような場合はどうだろう。

窓の外に雪が降っているのが見える状況で、

(5) 今夜は大雪になるダロウ。

この発話は、どんな場面で出現するだろうか。おそらく、独話<sup>2</sup>としてつぶやくのではないだろうか。あるいは周りに誰か人がいても、その人を意識せず、その人との会話<sup>3</sup>を特に成立させようという意図を持たず、やはり独話然として発話するだろう。これは、ダロウが持つ命題に対する真偽判断の機能（本稿では対命題機能と呼ぶ）を際立たせたものと考えれば説明が付く。ここではダロウは聞き手を巻き込んで会話を成立させるための機能（本稿では対人機能と呼ぶ）を一切発揮せず、純粹に対命題機能だけに特化して使用されていると考えられる。

つまりダロウは場面によって、対人機能を前面に出したり、対命題機能を前面に出したりして使用されることになる<sup>4</sup>。

一方でヨ・ネ・ヨネといった助詞は、話し手が自分の周りにいる人に話しかけ、その人を会話に巻き込んでコミュニケーションを成立させるという機能、すなわち対人機能しか持たないが、これがダロウと組み合わせて用いられると、複合体としてどのような機能を発揮するだろうか。以下にそれぞれと組み合わせた例文を記す。

(6) 今夜は大雪になるダロウ・ヨ。

(7) A：今夜は大雪になるダロウ・ネ。

B<sub>1</sub>：えっ、だったら早く帰らなくちゃ。そうかなあ、彼女のじゃなかったかなあ。

B<sub>2</sub>：そうね、この分だとかなり積もるわね。

(8) \*今夜は大雪になるダロウ・ヨネ。

(9) これは彼の鞆ダロウ・ヨ

<sup>1</sup> 木下 (2001) では、ダロウの真偽判断の用法と確認要求の両用法には推論という共通項が見られるとしているが、ここでの例に示したように、ダロウの意味記述に必ずしも推論は必要ない。むしろ発話時の話し手の不安感といった情緒的な面が大きなウェイトを占めているのではないかと私は考えている。

<sup>2</sup> 独話とは、特別誰かとコミュニケーションを図ろうとしてではなく、話し手自身が単に心情を吐き出す際の発話とここでは定義しておく。

<sup>3</sup> 会話とは、話し手が他者を巻き込んでコミュニケーションを図ろうとする際の発話とここでは定義しておく。

<sup>4</sup> 安達 (1999 : 186) には、「…確認要求の「だろう」が、話し手の判断を表すレベルからその外側のレベルに移行している…」とある。

- (10) A：これは彼の鞆ダロウ・ネ  
B<sub>1</sub>：そうかなあ、彼女のじゃなかったかなあ。  
B<sub>2</sub>：はい、さっき本人に確認しましたので間違いありません。
- (11) これは彼の鞆ダロウ・ヨネ。

ご覧のとおり、ヨ・ネそれぞれ単独でダロウに接続することは可能だが、ヨネという複合体でダロウに接続することは許されない。なぜこのようなことが起こるのだろうか。続けて以下の例を見てみよう。

話し手が聞き手が写っている写真と一緒に見ながら、

- (12) ほら、ここに写ってるのは君ダロウ。  
(13) \*ほら、ここに写っているのは君ダロウ・ヨ  
(14) \*ほら、ここに写っているのは君ダロウ・ネ。  
(15) \*ほら、ここに写っているのは君ダロウ・ヨネ

ここでは、ダロウは確認要求という対人機能を前面に出して用いられているため、同じ対人機能しか持たないヨ・ネ・ヨネの使用が制限されていると考えられる。その証拠に、以下の例のような場面では、話し手である刑事は、たとえ口調は強くても自分の判断を完全に信じてことができず、聞き手である容疑者に同意・確認を求めている。ダロウが推論・判断の不確かさから来る話し手の不安感を表し、ヨ・ネがその確認を聞き手に求めるという、機能の役割分担が行われている。

話し手である刑事が聞き手である容疑者と写真と一緒に見ながら、

- (16) ここに写ってるのはお前ダロウ  
(17) ここに写ってるのはお前ダロウ・ヨ  
(18) ここに写ってるのはお前ダロウ・ネ  
(19) \*ここに写ってるのはお前ダロウ・ヨネ

しかしながら、この場合にもヨ・ネ単独ではダロウとの共起が認められるのに、ヨネという複合体での使用は不可能になる。

### 3. 推論との関わり

たとえば、話し手が「明日は雨が降る」という情報を持っているとする。この情報は、明日（未来）のことなので、確定した事実ではありえず、したがってその情報の中身は推論によって得られたものでしかありえない。この場合は、話し手はどのように聞き手にその情報を提供するのだろうか。

- (20) 明日は雨が降る。
- (21) 明日は雨が降るヨ。
- (22) 明日は雨が降るネ。
- (23) 明日は雨が降るヨネ。

いずれの場合も、情報は推論によって得られた結論だと明示せず、無標の動詞の辞書形＝断定形を用いていることから、話し手は自分の推論の確かさに対する不安を一切覗かせていないと考えられる。つまり、命題内容は推論でありながら、確定した事実であるかのように提示しているのである。その上で、(20) の場合は、聞き手に有無を言わさないように宣言している<sup>5</sup>ので、会話というよりもむしろ独話的になっている。(21) の場合は、聞き手側には情報がないものと仮定し、話し手の推論を一方的に提示しているが、ヨを伴うがゆえに独話的ではないという点で、(20) とは異なる。(22) では、推量の機能を際立たせると独話的になり、確認の機能を際立たせると、会話的な使用となる。後者の場合、聞き手側にもおそらく同じ情報（この場合は推論）があると考え、同意を求めるといって、会話的な表現となっている。(23) の場合、話し手が自分の推論の不確かさを感じ、聞き手も同じ情報を持っていると仮定し聞き手に同意を求めている。いわゆる確認要求の一種である。

一方、「明日は雨が降る」という同じ情報を話し手側が持ちながら、ダロウを伴うことで情報は推論によって得られた結論だと明示的に提示している場合はどうだろうか。

- (24) 明日は雨が降るダロウ。
- (25) 明日は雨が降るダロウ・ヨ。
- (26) A：明日は雨が降るダロウ・ネ。  
 B<sub>1</sub>：そうですね。(推量系<sup>6</sup>：独話的発話を受けて)  
 B<sub>2</sub>：そんなこと知らないよ、神様じゃないんだから。(確認系<sup>7</sup>：会話的発話を受けて)
- (27) \*明日は雨が降るダロウ・ヨネ。

どうも、推論であることが明示されている場合には、ヨネは使えないようである。

同じように認識のモダリティであってもカモシレナイ、ハズダ、ハズガナイ、ベキダ、等はこのような制約は受けない。しかし、ダロウと同じようにヨネの接続を許さない、あるいは許しにくいものに、ソウダ（伝聞）、ヨウダ、ラシイが挙げられる。

<sup>5</sup> ここでは文末が上昇調になり疑問文相当となる場合については考えない。

<sup>6</sup> 宮崎 (1999) に、確認系・推量系のダロウネについての詳述が見られるのでそちらを参照のこと。

<sup>7</sup> 6に同じ。

- (28) 明日は雨が降るカモシレナイ/ハズダ/ハズガナイ・ヨネ。  
(29) 明日は雨が降る\*ダロウ/?ソウダ/\*ヨウダ/?ラシイ・ヨネ。

ここからは思い付きの域を出ないので批判を覚悟で書くが、同じ認識のモダリティ形式であってもカモシレナイタイプは話し手は自分の判断・推論等に、それなりの自信を持っているように感じられ、それゆえ「これが自分の考えです」とある種の「責任」を持って述べようとしているように感じられるのに対し、ダロウグループは、どちらかという情報に対する責任を、できることならば回避しようという話し手の意図が表れているように感じられる。伝聞のソウダなどはまさにその典型例で、これはあくまで人から聞いたことなので、私には一切責任はありませんと宣言しているかのようである。カモシレナイタイプは、あくまで判断・推論の確かさの違いをベースに、その使い分けがなされるのに対して、ダロウタイプは、判断・推論の確かさと平行して、どの程度自分が提示しようとする情報に責任を負えるかがその使い分けに関与しているのではないだろうか。ざっと順位をつけるなら、ダロウが一番責任を負い、続いてヨウダが続き、さらにラシイ、ソウダと続くように思える<sup>8</sup>。もちろん実際に使用されているデータを取って、検証してみることは必要だが、あながち間違いではないように思える。

#### 4. ヨネ

ここでは簡単にヨネについて考える。

- (30) 明日、僕もテニスの練習あるヨネ。  
(31) この本確か、君に借りたんだったヨネ。  
(32) 君、学生だヨネ。

ヨネが、単にヨ+ネという足し算で考えられるのなら、一般にヨが持つと言われる「聞き手にとっての新しい情報を話し手が提示する」という対人機能と、ネが持つ「話し手が、聞き手が持っていると考えている情報についての確認を求める」という対人機能を併せ持つことになるが、ヨの「聞き手にとっての新しい情報」と、ネの「話し手が聞き手が持っていると考えている情報」の共存には矛盾があるので、聞き手にとっての新しい情報という部分はキャンセルされて、ヨは単に「話し手が聞き手に情報を提示する」という機能だけを発揮するようである。また、ネ単独の場合に見られるような独話における推量系の使い方もヨネにはできない。

ヨネは情報・推論・判断に対する不安感を話し手が払拭すべく、聞き手に対して確認を要求している場面で用いられるといえる。だとすれば、前節で観察したように、ダロウが時に

---

<sup>8</sup> 野林 (1999) にも同じような記述・分析がある。

話し手が自らの推論・判断に対して不安感を抱いていることを示しているのとその意味内容が同じになる。その結果ダロウ+ヨネという複合体が用いられなくなると考えても問題ないのではないだろうか。

(33) 今日は雨が降るダロウ、ヨネ?

(34) \*今日は雨が降るダロウ・ヨネ

(33) は、いったん自分の推論を宣言した後で、自信がなくなりまわりにいる人間に同意確認を求めているような場面である。つまり、ダロウは対命題機能に特化して使用され、その後対人機能を持つヨネが発話全体を受け聞き手に対して発信しているという状況である。

(34) はダロウ・ヨネが複合体としてひとつになっており、その結果同じような機能を持つ二つの形式が同居することになり、使用が認められなくなっていると考えられるのである。

#### 【参考文献】

- 安達太郎 (1999) 『日本語疑問文における判断の諸相』 日本語研究叢書11、くろしお出版
- 木下りか (2001) 「ダロウの意味」『阪大日本語研究』 13、大阪大学大学院文学研究科日本語学講座
- 三枝玲子・中西久実子 (2003) 『日本語文法演習 話し手の気持ちを表す表現—モダリティ・終助詞—』、スリーエーネットワーク
- 佐治圭三 (1991) 『日本語の文法の研究』、ひつじ書房
- 仁田義雄 (1989) 「現代日本語のモダリティの体系と構造」『日本語のモダリティ』 仁田義雄・益岡隆志編、くろしお出版
- 仁田義雄 (1991) 『日本語のモダリティと人称』、ひつじ書房
- 野林靖彦 (1999) 「類義のモダリティ形式「ヨウダ」「ソウダ」「ラシイ」—三水準にわたる重層的考察—」『国語学』 197集
- 蓮沼昭子 (1995) 「対話における確認行為—「だろう」「じゃないか」「よね」の確認用法—」『複文の研究 (下)』 仁田義雄編、くろしお出版
- 益岡隆志 (1991) 『モダリティの文法』、くろしお出版
- 三宅知宏 (1994) 「認識的モダリティにおける実証的判断について」『国語国文』 63-11、京都大学国語学国文学研究室
- 宮崎和人 (1999) 「確認要求表現としての「ダロウネ」」『日本語科学』 6
- 宮崎和人・安達太郎・野田春美・高梨信乃 (2002) 『モダリティ』 新日本語文法選書 4、くろしお出版
- 森山卓郎 (1989) 「認識のムードとその周辺」『日本語のモダリティ』、仁田義雄・益岡隆志編、くろしお出版
- 森山卓郎・安達太郎 (1996) 『日本語文法セルフ・マスターシリーズ 6 文の述べ方』、くろしお出版